

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

| | | | |
|---|--------------------|------------------------|------|
| 博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.) | 博士 (文学) Ph.D. | 氏名 (Candidate Name) | 郭 妍琦 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | |
| 論文題目 (Title of Dissertation) 明治期における「良妻賢母」論と国家主義的女子教育思想の形成と展開 —中村正直「善良なる母」(1875年)から下田歌子『婦人常識の養成』(1910年)まで— | | | |
| 論文審査担当者 (The Dissertation Committee) | | | |
| 主 査 (Name of the Committee Chair) | 教授 河西 英通 | | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 教授 勝部 真人 | | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 教授 衛藤 吉則 | | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 総合科学研究科・教授 布川 弘 | | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 准教授 溝渕 園子 | | |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 鎌倉女子大学・専任講師 伊藤 由希子 | | |
| 〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation) | | | |
| <p>本論文は、標題に関して、良妻賢母思想の創始者といわれる中村正直の啓蒙主義的主張と、良妻賢母主義を明確に言説化した下田歌子の国家主義および女子教育観の変容と展開の比較検討を通して、論じたものであり、序章(第一章)、本論第二章～第七章、および終章(第八章)の全8章から成る。</p> <p>第一章「序章」は、良妻賢母像がどのように形成され、どのように国家による教育の目標にされたか、すなわち「女性問題における国家主義」を検討することは近代日本の女性運動を論ずるにあたってきわめて重要であるとの問題意識から、先行研究の積極的批判を試みている。</p> <p>第二章「議論の背景—近世女性像・近代女子教育・家族国家」は、議論の背景として、近世女性像・近代女子教育・家族国家について概念整理をおこない、近世女性像の分析から良妻賢母像形成の前史を論じ、近代女性像の言説の中に良妻賢母主義を指摘している。</p> <p>第三章「中村正直の「良妻」・「賢母」と女子教育」は、中村正直の良妻賢母思想の全体像を分析しているが、その際、中村が幕末維新期のヨーロッパ留学体験を通じて、良妻賢母思想をキリスト教的な国際社会秩序における普遍的原理として構想していったことに注目している。</p> <p>第四章「下田歌子の初期女子教育の展開—伝統的女子教養から「国のため」の女子教育へ」は、下田歌子の初期女子教育の取り組みについて、「下田学校」「桃夭学校」「桃夭女塾」「華族女学校」における活動を詳細にあと付け、桃夭女塾や華族女学校において良妻賢母主義が萌芽したことを論ずる。</p> <p>第五章「下田の欧米留学と国家主義的女子教育観の形成」は、欧米留学を通して、下田が大衆的女子教育の必要性を痛感し、帰国後、良妻賢母思想に立って帝国婦人協会を組織することで、近代国民国家の基盤として女子教育、国家主義的な女性観・女子教育観を形成していったことを論じている。</p> <p>第六章「下田の大衆女子教育と階層的女性観の形成」では、国家主義的女性観は「中上流」の女性には良妻賢母を、「下流」の女性には安価な労働力を求めるという「階層的女性観」に結びついていったことを、実践女学校と女子工芸学校の設立とその活動の分析を通して、説得的に論じている。</p> <p>第七章「下田の職業観と女性に対する「国民教育」」は、女子教育無用論に、下田が女子教育の国家主義的機能を強化することで対抗するとともに、女性の社会進出には消極的職業観を対峙し、家政優先論を堅持していたと論ずる。国家と社会のはざまに置かれた下田の姿を適切に描いている。</p> <p>第八章「終章」は、前章までの分析を整理して、「日本の「良妻賢母」論は、中村の言説に見られた明治啓蒙主義的なものから、下田の言説を一つの重要な起点として、自己犠牲の精神と日本の独自の文化や政治体制を強調する国家主義的なものへと大きく展開・変容した」と結論付けている。</p> <p>本論文は中村正直と下田歌子の良妻賢母思想の詳細な分析を通して、その国家主義的原理の形成過</p> | | | |

程を詳細に論じたものである。とくに従来、近代における良妻賢母思想が中村から下田へいわば単線的に発展していったかのようにとらえられてきた点を批判し、下田の国家主義的立場を、彼女の全作品を分析することで、明確に確認した点に大きな意義があると思われる。

国民国家論における女子教育、ひいては女性の位置づけをも展望したスケールの大きい論文であり、筆者も自覚しているように、今後、日中比較も含めて、東アジア全体をフィールドとした研究を期待したい。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)